

京まち工房



no. 2

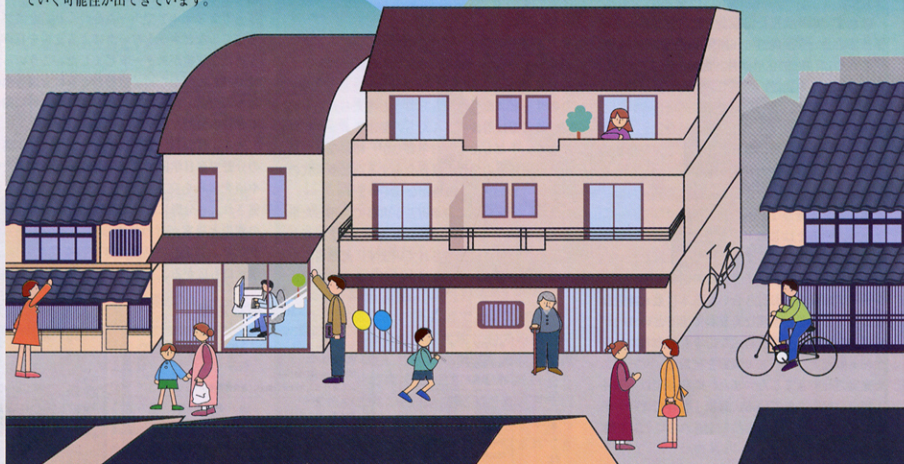
（財）京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

まちと共生する共同住宅を目指して

マンションとマンションの入居者が変わろうとしています。今回はこの変化、そして変化による地域でのまちづくりの可能性について報告します。

従来、マンションが建設されると、町並み景観だけでなく多くの見知らぬ住民が一度に入居することなどにより、まちの様相がガラリと変化することがよくありました。しかし、バブル崩壊後、状況は変わろうとしています。マンションへの投機が減り、本当にまちに住みたい人が住むようになってきました。つまり、住まいやまちを生活の舞台として楽しむ人たちが入居する「まちと共生する共同住宅」が増えていく可能性が出てきています。



新しいマンションの仕組として、共同生活を希望する人が組合をつくり、事業主となるコーポラティブハウス*が有名ですが、今京都では、セミコーポラティブマンション、プライベートマンションなど、都心部での新しいマンション事業が生まれ、まちづくりの新しい息吹へ期待が膨らんでいます。

今回は、京都でのこれら新しいマンションの事業主に、①その供給方法、②想定される居住者像、③地域のまちづくりへの貢献の可能性について伺いました。

*7頁に、都心でのマンション事情、コーポラティブハウスについて解説。

セミコーポラティブマンション

事業主：スタジオトミタ
富田 喜一郎氏 建築家



①マンションの入居予定者の代表が事業主となり、入居者となる共同事業参加者を募る。住まいの質を追求し、高い天井、ゆったりとした間取りなど分譲一戸建て住宅の感覚で設計。戸数は16戸（うち事務所2戸）。

- ②質の高い住まいを求める人、まちに住む魅力を知っている人。ファミリー。
③住まいに対するこだわりは、まちに対するこだわりにも通じると考えられる。

プライベートマンション

事業主：アールエスティグループ
天野 博氏 不動産業者



①マンション建設前に入居者を募り、入居者自らがそれぞれの住まいの間取りや内装を決める。建築前に入居者の姿がわかり、かつ入居者が勝手に売買することができない。戸数は11戸。小規模なマンションであることと、

- とから、建築前に近隣との調整が可能。
②住まいを自らデザインすることに興味がある人、まちに住む魅力を知っている人。ファミリーと1人世帯。
③住まいをデザインすることを、まちをデザインする方向に生かす。

あなたのまちづくり 拝見

春日住民福祉協議会

“お隣り同士のふれあいを大切に”をモットーに

住民主体のまちづくりをさまざまな観点から紹介するこのコーナー。今回は、高齢者の在宅福祉活動を中心に地域住民相互のふれあいネットワークで継続的なまちづくり活動に取り組まれている春日住民福祉協議会を紹介する。いわば「地域まちづくりの先進地」として知られる春日で、どういったまちづくりが展開されてきたのかを拝見しました。

学区組織と地域ボランティアが見事な連携

西に京都御所、東は鴨川が流れるという恵まれた環境に位置する春日学区。明治2年間校の春日小学校を核にさまざまなコミュニティ活動の歴史を刻んできましたが、時代とともに少子・高齢化、核家族化の波は押し寄せ、「このままだは地域からほとんど人がいなくなってしまう。人のぬくもりを感じられなくなるのでは…」といった危機感から住民の手によるまちづくり活動が始まりました。

これまでの社会福祉協議会を改組し、春日住民福祉協議会（学区内21町16団体が構成）として発足したのは、昭和48年9月。発端となったのは、高層マンション建設の問題で、住環境保全のため7か町が団結し、話し合いで問題解決に導いたことが大きな自信につながり、その後今日まで、各町の自治活動を縦横に各種団体による住民福祉活動が横断となり、網の目ネットワークでしっかりと地域を支え続けてきました。ひとり暮らし、寝たきりのお年寄りなどへの訪問活動やシルバースクールの開催をはじめ年間を通じて数々の地域福祉活動が展開されています。中でも注目したいのが各町単位のボランティア部員の活躍です。ボランティアは日頃のお付き合いを基本に最も身近なところを担当し、無理なく交替するというのが原則。高齢者、体の不自由な方を対象としたアンケート調査で、ニーズ・実態を把握し、サービスを充実させてきました。また、昭和48年以来毎月1回全戸配布されている広報紙「春日だより」が地域交流に果たしている役割を忘れることはできません。

きめ細かな工夫が生きる —ミニシアサロン、福祉防災地図



春日ミニシアサロン

春日の活動には、独自に考えられたさまざまな工夫が見られます。元春日小学校の教室を改修し

て設置された春日デイケアセンターでは、月2回、ミニシアサロンが行われています。これは、公共のデイサービスセンターを利用できない虚弱なお年寄りを対象にもっと身近に手づくりのサービスを受けてもらおうと考えられたもので、ここでは看護婦さんたちの健康チェックだけでなく、子どもたちとお年寄りが一緒にあってあやどりと防災の学習、昼食会をするなど多世代のコミュニケーションの場となっています。

また、昭和54年にお年寄りが火事で焼死した事件の反省から生まれた福祉防災地図は、2年ごとに改訂され全戸に配布されています。避難場所や経路などが記されているほか、ボランティア用に



福祉防災地図

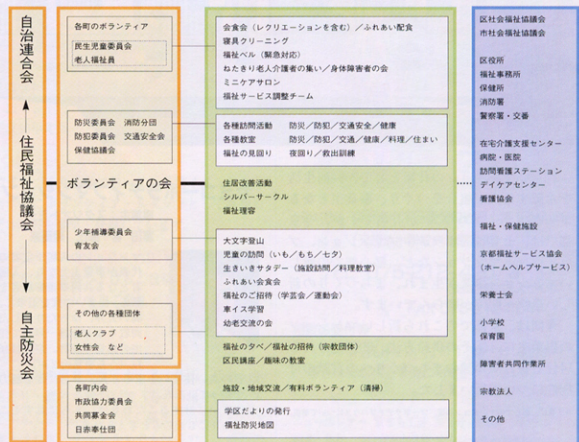
はひとり暮らしや寝たきりのお年寄りなどのいる世帯を色分けした地図で、状況が一目で把握できるようになっています。火事の事件をきっかけにより深く、より幅広い住民同士のふれあいを進めなければならないという問題意識からこういった工夫が生み出されています（これらの取組により、平成8年度に「防災まちづくり大賞・消防庁長官賞」を受賞しました）。

福祉から明日のまちづくりへ

これまでの学区の諸活動で培われたネットワークをもとに、平成8年度には「春日福祉サービス調整チーム」が発足。高齢者の在宅での生活を地域で支え合うため、行政、専門機関と学区の諸団体・ボランティアでチームをつくり、介護サービスを立てるなどネットワークによる支援を行うという新たな取組がスタートしました。こういった団体でのきめ細かな福祉活動とともに全国各地の団体との交流も活発に行われ、地域から外に向かって春日の発信は積極的に行われています。

去る1月24日、福祉、健康・医療、食生活などの分野で春日学区で調査・研究を行ってきた学生や研究者らと交え、「春日21シンポジウム」が開催され、各分野における住民の意識調査結果などの報告と提案が行われました。「若人たちがボランティアとして活動できる場を増やす」「他の学区にも広がるよう春日がリーダー的存在になっ

地域福祉活動



春日学区の福祉活動と推進組織（春日住民福祉協議会「春日からの発信」より）

お知恵拝借～

コミュニティの存在が 大きな力を発揮

神戸 北野・山本地区

「異人館」と呼ばれる洋風建築と和風建築が混在する独自の町並み、そして洗練されたファッションタウンとして有名で、多くの人が訪れる神戸の北野・山本地区。3年前の阪神・淡路大震災からの復興の取組は、エキゾチックなまちの風貌からは想像できない、人との豊かなつながりがキーワードとなりました。

北野・山本地区の取組

本地区は、昭和54年に都市景観条例に基づく「北野町山本通都市景観形成地域」及び「伝統的建造物群保存地区」に指定。きめ細やかな景観誘導を図るために「景観形成基準」が定められ、建築物の新築等に当たっては、基準に沿うよう助言や指導が行われています。

一方、こうした行政の取組と併行して進められたのが、急増する観光客への対応と、地区景観の保全・育成を目指して昭和56年に結成した「北野・山本地区をまもり・そだてる会」（関係6自治会・2婦人会、事業者で組織）の活動。住宅地と商業地、観光地としての顔を持つ地域のあるべき姿の検討を重ね、住民や事業者の間で「まちづくり憲章」や「まちづくりの約束」が締結され、月1回のクワイア作戦、ウォークラリーやまちなみフェスタなど活発に取り組まれてきました。



修復された風見囃子の館

阪神・淡路大震災を契機に

平成7年1月17日の震災では、本地区も罹災し、異人館は数棟が半壊、どの館も煙突が落ちました。文化財指定の建物の修復には行政から手厚い助成がありましたが、未指定の建物の修復は居住者にとって大きな負担となりました。しかし、震災でまちの風景を奪われたことが逆に契機となって、まちのシンボルとしての異人館への熱い思いが地域で共有され、「北野・山本地区をまもり・そだてる会」が主体となり歴史的建造物の保全を目的とする「異人館基金」を自主的に創設。これは①異人館を当会が借り受け、資料館やセンター機能を担う施設として活用する、②歴史的なものなどを収集・整理し、「まちの記憶を引き継ぐ運動」を広範囲に展開していく、③異人館をはじめ市内他地区を含む伝統的建造物保全のための助成・融資を行うなどの事業を目的とするものです。

本地区から得られた教訓

基金が設立できたのは、従来から目的を持って活動していた住民組織があったからでした。また本地区では震災による

大きな火災は発生せず、これも、細く急勾配な路地が多く、消防車が入れない道があることを住民が常日頃から意識し、防災について地域の意識統一が図られていたからではないでしょうか。

失われた町並みを取り戻していくこと、そしてよりよいまちを創り出していくこと、これらは同じ目的を持ち、お互い助け合うというコミュニティの存在が大きな力を発揮しました。このことは、伝統的な建物を抱える京都のまちづくりに対して、一つの教訓を与えているのではないのでしょうか。



春日21シンポジウム

て欲しい」など具体的な提案とともに、若い世代の参加と発想で、福祉活動からもっと幅広くまちづくりを考えていこうという参加者の熱い思いを感じました。

これまでのふれあいネットワークを生かしながら、福祉から明日のまちづくりへと、春日は着実に歩み始めています。

まち全体が活性化して 21世紀につなげていける まちづくりを



春日住民福祉協議会会長
高瀬 博章さん
きちっとしたシステム
で公的介護サービスが行
われていくとしても、介
護と介護の休閑を埋める
のはやはりお隣り同士の
ふれあいなんです。隣り
同士ボランティアで支え合
う、そういう気持ち
が広がると、ネットワーク
となるのです。

これまで春日が長く取り組んでこられたのは町内会の集まりである「自治会連合会」だけでなく、関係諸団体の縦割り組織も含めた「自治連合会」が大きく機能してきたからでしょう。団体長会議を毎月行い、それぞれの役割と動ける日程をうまく調整しながら助け合っています。そういったスタイルができていけば、たとえリーダーがいなくなってもやっていけると考えています。

しかし、これからは福祉だけでまちは支えられない。京都市全体が活性化して21世紀につなげていけるまちづくりが必要でしょう。そして若者が21世紀に向けてまちをどう構築していくかが大きなカギになるでしょう。景観・まちづくりセンターには、まちづくりのハード面だけでなく、ソフト面、ネットワークの充実による活動展開を期待しています。



みなさんからのたくさんの情報をお待ちしています！

あなとのまちづくり拝見

地域で実践中のまちづくりを紹介します。情報をお寄せいただければ取材に伺います。

まちづくり自由討論会

京都のまちづくりについて、言いたいこと、聞きたいこと、地域や個人から発信したい情報等、たくさんお寄せください。

お知恵拝借～ 他都市のまちづくり

他都市の先進的事例等を紹介します。

教えておくれやす

まちづくりに関する疑問、疑問
お助けコーナー

まちづくりに関する疑問、疑問も大歓迎です。

京のまちの今昔物語

皆さんがご持ちの京都の昔の町並み、風景、人々の暮らしがわかる写真や絵に文章（思い出語や言い伝え、逸話等）を添えてお寄せいただき、現在と比較しながら紹介するコーナーです。

◆投稿の方法については8頁をご覧ください。

(財)京都市景観・まちづくりセンター設立記念

第1回景観・まちづくりシンポジウム

昨年12月17日に京都山一ホールにおいて、第1回景観・まちづくりシンポジウム「京町家の保全・再生を考える」を開催しました。当日は雨天にもかかわらず、約200名が参加。京都大学教授の高橋康夫氏による「京町家の歴史」をテーマにした基調講演の後、京町家の保全・再生に取り組みされている市民団体や業界団体の方々によるパネルディスカッションを行い、京町家の未来について意見交換を行いました。

基調講演概要

「我々の持っている町家の知識はごく限られたものであり、京町家もいろいろな類型の中の一つに過ぎない。しかし京町家は、1200年の都市生活の中で生まれた、町家の原形である。その特徴は、庶民の住む「小屋」、ものを見せる「棧敷」、ものを売る「店」の機能を合わせ持った複合建築であること、「道」に面して建てているということである。

また、その町家を再生するためには、3つの空間の再生が重要であり、①「道」の再生：今は車が通すだけの空間になっており、道を共有の空間として再生する必要がある。②「おもて」の再生：居住領域と道（＝共有空間）の間の中間領域、「おもて」と呼ばれる町家の空間をうまく利用する。③「うら」の再生：江戸時代、裏商家、蔵の建物などがあつたこの領域は都市居住の構成をなさないといわれていたが、社会構造の変化を踏まえ、この空間の文化的なあり方を反映させることが大切である。

さらに町家の再生が、街区全体の活性化へとつながっていくだろう。



高橋康夫氏

等の発言があり、皆さんがさまざまな分野の方が参加するネットワークの必要性を訴えられました。そのほか、「建物に活力、経済力が無いと維持していけない」などの意見がありました。

「今後はネットワークを広げていくことが重要であり、今日お集まりの各団体や市民ボランティア調査員に参加を得て行う調査を通じ、その中で得ら



パネルディスカッションの様子

パネルディスカッション

保全再生の実践から京町家の未来を探るというテーマのもと、京都府立大学の宗田好史助教授をコーディネーターに、以下の方々をパネリストに迎えパネルディスカッションを行いました。

パネリスト：小島富佐江氏（京町家再生研究会）、東樋口護氏（木の文化研究会）、栗山裕子氏（古材バンクの会）、衛藤照氏（社団法人 京都府建築士会）、堀菜二氏（京都府建築工業協同組合）、細川雅則氏（社団法人 京都府建設業協会）、黒竹節人氏（株式会社 くらちく）

パネリストからは、

「町家の非居住者から見るとなぜ町家を取り上げるのかという意見があり、居住者と非居住者の意識をバランスよく共生させることが大切である」

「事業者の立場から、町家を壊してマンションを建てたり、格子戸をアルミサッシにしたりしてきたが、材の再利用、新タイプの町家への建替えなどの仕組みがあればいいと思う。そのためには、居住者、研究者、建築建設業者が一柱になって考える場が必要である」

「それぞれの会では、緩やかではあるが個人ではできない成果を上げており、今までの活動を通じて、ネットワークが重要な役割を持つことを実感している」

れたものを京都のまち、町家居住者に伝えていくことが、ネットワーク形成の第一歩ではないでしょうか」というコーディネーターの言葉で幕が閉じられました。

会場からのご意見ご感想

相続税や改修費用などの経済的な問題に対しての意見が多くありました。また、「一見町家風であっても屋内がコンクリートやタイルで固められたものが果たして町家といえるのか」という意見に対しては、「町家と道との関係を考えれば、町家の良さを生かしたプレハブでも良いと思う」と、町家とは何かという観点からさまざまな意見が出ました。その他にも、「現在町家に居住しているが、家を改修しなければならない場合の方法を教えたい」「町家を実際に見て触れて、実感しないとわからない」「町家を残すのは大事だが、まち＝コミュニティを残す、再生する事が大事」「高橋先生のおっしゃった町家の3要素「道、おもて、うら」の再生に向けたネットワークが、これを機会に少しずつ広がっていくことを希望します」等発案意見がありました。



基調講演中スライドで上映された年中行事絵巻～「道」が生活の場として存在している様子が伺える（模本・京都市立芸術大学芸術資料館蔵）

センターでは、京都らしさを構成する歴史資源の一つである京町家の保全・再生に向けて、4月中旬より、都心区での実地調査を行います。

「まちづくり交流」

まちづくり活動を継続していくうえで大切なことは、資金面のやりくりもさることながら、自分たちの活動をいかに多くの人たちに知ってもらい、情報交換を図ることではないでしょうか。

今回は、まちづくり活動を行う複数の団体が、それぞれの得意分野の知恵を出し合い、交流しながら、さらに実のあるまちづくり活動につなげている「京都のまちづくりを考える会」をご紹介します。

ゆるやかなネットワークをまちづくりに

「京都のまちづくりを考える会」は、各年の秋、市民参加型の都市計画で成功を取ったドイツのミンヘン市の都市計画局長ワルター・プーザ一氏の講演を聞きと集まったまちづくり活動団体が、フォーラム後に行った反省会が、「京都にも市民団体等の経験交流の場を」と結成したものです。その顔ぶれは、30年以上の活動歴を持つ住民福祉協議会から数年前に発足した有志の研究会までさまざまですが、まちづくりに関する情報

(参加団体) (順不同)

春日住民福祉協議会 (075-231-4810)

春日学区という地域コミュニティの場で、自治活動と福祉活動を核として、各町内会と各種団体が網の目のように支え合い活動を行う。(2頁に連記記事あり)

西陣学区住民福祉協議会 (075-441-5394)

安全で住みよいまちづくりを目指して、西陣地域の活性化、西陣地域の将来を展望し、西陣住民ふれあいまつりや各種見学会を実施。

木の文化研究会 (075-753-5729)

伝統的木造建築を再評価し、職人、設計者、研究者、住まい手などが協働してネットワークを構築し、木造の可能性について提案を行う。町家躯体体験イベント等を実施。

京町家再生研究会 (075-211-6464)

京都の伝統的街区にある町家及び町家町内の調査、研究並びに、それらの再生方法の提案及び再生の実践活動を行う。

絆の会 (075-351-2565)

町家の抱えるさまざまな現実問題を踏まえ、伝統文化として継承されてきた部分を、今後の暮らしづくり、楽しみ方などにどう組み込めるかを考え、その成果を町家を舞台に発信する。

住生活研究所 (075-361-8285)

コミュニティ形成と実態把握等に関する調査研究、コ・オペラティブ住宅、町家の保全再生等の企画設計、情報紙の出版、編集等を行う。まちづくりのワークショップのコーディネーターとしても活躍。

姉小路界隈を考える会 (075-221-1322)

中心街に残された町並み・景観・生活環境の保存や改善と、安心して住める環境づくりを目指し、隣組組織を通じ老人問題や子供たちつなごうがらみなどに取り組む。

換を行う場として、ゆるやかな結びつきの中で交流を続けています。会員間で興味のある分野の情報交換や知恵の出し合いは、個々の団体の視野を広め、個々の団体だけでは解決が難しい具体的な課題の解決にも力を発揮。活動の切り口は違っても、「すばらしいまちにしたい」との思いがこのネットワークの芯となり、自分たちが主体となったまちづくりへの大きなうねりとなりつつあります。

都市居住推進研究会 (075-222-2900)

人口の減少が顕著な京都の都市居住の実現に向けて調査研究を行うとともに、その成果を提言し実行する。

伏見観光協会 (075-622-8750)

伏見の観光や商業などを自らの手で担うことを目的として、地元活性化のPR、イベント等を企画し実行する。

古材バンクの会 (075-222-1776)

古い建築材を多様な資源として活用するために、木造建築の持っている歴史や特徴についての調査や再生の相談を実施。

大黒町まちづくり協議会 (075-431-0020)

良好な景観・環境形成、地域産業や文化の向上に寄与することを目的とし、講演会、見学会、広報、啓発事業等を行う。

京都福祉生活協同組合設立发起人 (075-645-4441)

来たるべき高齢化社会を市民の自発的な支え合いによって解決するため、仲間・人材づくりなどの各種養成講座、住環境事業、生涯住宅のあり方等に関する研究事業を実施。

消費者経済研究所 (075-351-3570)

住生活通市場の調査・分析、住み替え・買い替え層の深めからまちづくりへの問題提起を行う。コ・オペラティブ住宅の建設や、阪神大震災の被災マンションに対する再建活動にも関わる。

リアル・リ京京都 (075-801-5629)

新しいエコボリスの創造に向け、会員相互の親睦を深め、経験・技術・経済の交流と団結を推進する勉強会、研修セミナー・機関紙の発行等を実施。

環境市民 (075-211-3521)

一人ひとりの違い、団体の違いとパートナーシップを大切にし、実行的な行動をする環境NGO。環境を考え、感じるさまざまな催し、専門的な調査研究を行い、企業・行政に提案。各国の環境NGOとの交流・協力を進める。

ニュービジネスの動向

このコーナーでは、ビジネス界で新しく立ち上がった、もしくは企画段階の新発想のビジネスの動向についてインタビューによる紹介を行います。

株式会社

キンデン

代表取締役社長 吉本幸男氏

一事業内容を簡単に教えてください。



昭和39年に創業し、ずっと大手メーカーのコンピュータや制御装置を扱う特約店でした。しかし、それでは限られた分野の商品開発しかできないし、将来の発展もないと考え、本業をベースに、JPSという新しいシステムを開発しました。これは、社員寮やワンルームマンションなどの集合住宅内に設置した構内交換機(PBX)を活用し、警備や設備管理を行うものです。また、第3電気といわれる通信分野での事業展開も行っています。

我々が提供するサービスに対するお客様の反応や要望を聞き、次の商品開発に活かす。しかも早く。我々のような中小企業こそ早く対応できます。そうやってニーズを次々と商品に反映させているうちに、いろんなことをやるようになったんです。「町の電気屋の領域はここまで。昨日までもそうだったし、今日も明日からも」ではなく、「どこもやらないならうちがやろう」という発想で、ネットワークと通信機器をトータルに運用することで付加価値をつけ、競争力をつけました。

まちづくり提案

新しい町家リフォームの提案 大阪ガス(株)

京都の町家の良さを見直し、快適に住むための提案を行う町家リフォームのモデル展示コーナーが大阪ガス総合ショールーム「ディリア京都」内に完成しました。

これまで一般住宅のリフォームを手がけてきた大阪ガス(株)が、これからも長く町家に住み続けることができるよう、京都の地域特性、ニーズを考え、また若い人にも木の文化を再発見してもらい、町家に住んでもらえたらという観点から京都ならではのリフォームの提案、また設備改善に向けた情報交流の場として考案されたものです。

冬寒く、使い勝手が悪く、古い町家ですが、伝統の知恵を上手に活かす、現代風のアレンジを加えることによって、一歩進んだ快適な生活空間を実現す

私と京都

芽生えから若木へ



(財)京都市景観・まちづくりセンター評議員

相川 雅則

(社)京都府建設業協会青年部直前会長。

私が京都にかかわりだしたのはいつの頃かだったろう？長い間、自分と自分のまわりのせまい空間や、あるいは、自分の内側(だけ)目に向けて暮らしてきたような気がする。「京都にかかわる」などと言うと何か大上段にふりかぶったような物言いだけれど、それは言いかえれば、この京都の町の都市づくりの計画や暮らしに、1人のアマチュアとして発言したり、考えたり、提案したり、行動しても「別にいかまへん」ということに気づくこともありません。

「まちづくり」かたい言葉でいえば「都市づくり」や「暮らし方の計画」(本当はもっと広いはず)は従来コンサルタントや「お役所」の専門家の専売特許と思われていた分野であった。ところがその専門家たちが悩まはじめていることが、世の中に「はじめて」しまった。「えらい」専門家たちが計画した公園が遊んでいる。「公園で遊んでいる」のではなく「公園が遊んでいる」のである。利用者に喜んで使われない施設を作っても、「しゃあないやないか」と悩まはじめたまじまじの専門家たちは、「それならいっそのこと 利用者にはじ

めから相談してしまえ！」という暴挙に出てしまった。これは従来の「お役所の掟」に反する一大事だったのだが、何故かそのプロジェクトに関係した住民や利用者からは大評判で、行政の専門家たちも、さすがに満足感を得たという。これが、住民(利用者)と行政とが手を携えはじめたパートナーシップの芽生えである。

この芽は、ここ京都では94年の梅小路での緑化フェアの子供の遊び場ワークショップにおいて発芽し、嵐山観光トイレづくりワークショップで双葉へと育ち、現在、清水の防災まちづくりその他の複数の若木へと成長している。西陣学区では地元元気な「まちづくりおじさんたち」が「西陣わっしょい」というお祭りを企画したり、千本でもイギリスのマンチェスターからの講師を招いて、まちづくり講演会を立ち上げたりしている。元気な住民と顔の見える行政マンたちとのパートナーシップ=協働がスタートしている。

「そう、自分の暮らすまちやもの。もっともっと、口出しするのいいですよ！ 住まい方、暮らし方を一番よく知ってるのは、私らですもの」

センター語録

京都市景観・まちづくりセンターが発足して約半年。昨年末開催の町家町の保全・再生をテーマにした「景観・まちづくりシンポジウム」では、約200人の参加者を測り、同時に募集した「町家調査員」には160名を越える応募者がありました。また、現在「まちづくりフレンズ」には約60人の登録があり、「賛助会員」は151人・17団体を数えています。さらに、愛称とロゴ(シンボル)マークも決定し、早速、本号からこのニュースレターの名称を「京まち工房」とし、タイトの部分にロゴ(シンボル)マークをあしらいました。

ということで、いよいよ第一歩を踏み出しましたが、これから住民、企業、行政の多様なパートナーシップによる地域の身近なまちづくりを推進する事業を、さらに充実させて展開していくため、いろいろな準備を進めているところです。

センターは、幅広い方が集い、交流し、活用していただくことではじめて光を放ちます。センターが着実に成長していくために、皆さんからのご意見・ご提案、ご支援を今後ともよろしくお願い致します。

(景観・まちづくりセンター事務局 MM)

はたとば湿布 Vol.2



センターからのお知らせ

賛助会員の募集 (平成10年度分)

京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

(特典)

- ・ニュースレター(年4回・季刊)の送付
- ・ニュースレターでの活動紹介
- ・セミナー等の参加料の会員割引

(年度会費)

個人1口：5千円 団体1口：5万円

(平成10年4月～平成11年3月)

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくり活動において、各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

お寄せください ご投稿・ご意見

ニュースレターを盛り上げるご投稿や、京都のまちづくり、センターに対するご意見・ご提案をお待ちしています。

〈投稿の方法〉

原稿や写真等の資料とコーナー名・住所・氏名・年齢・電話番号・匿名希望の有無(有りの場合はペンネーム)を明記し、「京まち工房」係までお送りください。封書・はがき、又はFAXでも結構です。紙面の都合上、全てを掲載できないこともあります。

(財)京都市景観まちづくりセンター「京まち工房」案内



〒604-0848 京都市中京区両替町通押小路下る金吹町452

(元龍池小学校内1階南側)

TEL 075-212-4031
(支線・参加・入づり)

FAX 075-212-4047

相談の受付等

月～金(祝日を除く)の9:00～17:00(来所される場合はなるべく事前に電話ください)。

ニュースレター 京まち工房 第2号 1998年3月
編集・発行 (財)京都市景観・まちづくりセンター
印刷 日本写真印刷株式会社